

資料③ 「天の川」 地上に広がる

資料の中で「見るだけでなく体験することで、より秋田への関心が高まる」という言葉に強く共感しました。大学のゼミにて大仙市の田んぼ作業を手伝う機会があり、それまで文献や知識から理解したつもりになっていた農業や地域について、実際に体験し、現地の方々と話をすることでしか得られない気づきがあることを学びました。その経験を通して、より一層秋田に興味を持ち、地域への愛着は「自分事として体感すること」から生まれると実感しました。そのため、市民が市の行事に主体的に携わる機会は非常に重要だと考えています。残り少ない学生生活の中で、自ら人を巻き込みながら活動する力をさらに磨き、秋田県と関わる人の輪を広げていきたいと思います。

この資料を読み、中学校の頃のミニかまくら作りを思い出し懐かしくなった。雪が重くてバケツに入れるのが大変だったが、グループになって行くと、かまくらを作る人、整形する人、穴を作る人など、役割分担が徐々にできてきて、楽しかった。大学で県外に住んでいると、「よこて」のイメージについて「かまくら！」と言う人が多い。他の県でも有名な伝統的な行事に参加できた経験はとても貴重なものだと感じている。また、中学校の頃にはミニかまくら作りの後に、かまくら接待も行った。県外の方や、海外の方に実際に横手を PR する経験も自分の財産となっているので、より多くの人にこの経験をしてほしいと感じた。

この記事を読んで、秋田の冬の文化の魅力を改めて感じました。私は関東の大学に通っていますが、秋田出身であることを話すと、多くの人が「かまくら」を知っていて、秋田の冬の風物詩として広く知られているのだと思いました。私自身も高校生のとき、校庭にミニかまくらを作ったことがあり、その景色の記憶や写真は今でも残っています。記事にあるように、ミニかまくらは秋田だからこそできるもので、全国どこでも作ることができるものではありません。そんな、秋田にとって大切な文化であるかまくらは、これからも守り続けていかななくてはならないと思います。これからも地域の人々が協力しながら伝え続けていくことで、秋田の魅力を発信していきたいですし、もっと多くの人に知ってほしいと強く感じました。

この記事を読んで、ミニかまくらの魅力と横手の温かさを改めて感じる事ができた。自分とミニかまくらとの関わりを思い出したからだ。自分は、小学校 6 年間でミニかまくらづくりに参加していた。自分や周りの人々が作ったミニかまくらが、夜になって点灯されたとき、感動した。また、人との温かい交流や行事に参加することへの楽しさを経験した。「ミニかまくら」の魅力は、一つ一つの形や大きさが違って見るに飽きないことと、それでも一体感が感じられることだ。そして寒い季節だからこそ、温かさを感じる事ができるのが魅

力である。記事の中に、「県外出身者に地元が気づいていない秋田の魅力を掘り起こしてほしい」とあった。これについて、県外出身者だけでなく、県外に住んでいる秋田県出身者である自分も新たな秋田の魅力の発見に携わりたいと思った。自分が県外に住んで学んだことや感じたことを還元していきたい。

この記事では秋田県横手市で開催された「かまくら祭り」の様子が紹介されている。市民が作り出した約 3 万個のミニかまくらに灯を灯され、その光景はまるで天の川だと書かれてあった。記事を読みながら、地域の人々の想いが詰まった祭りの美しさと、それを降雪量が変化しようと長年同じ形で行うことを支える市民の努力に心を打たれた。特に印象的だったものは、ミニかまくらを一つ一つ手作業で作っているという点だ。寒い中の作業は決して楽ではないと思うが、それでも毎年続けているというのは、地域への誇りや伝統を守りたいという強い思いがあるからだと考える。また、幻想的な光景をみた来場者の「感動した」「また来たい」という声からもこのお祭りが単なる観光行事ではなく、人々の心に残る体験へと変化していることが読み取れた。その姿勢は、情報社会になっている現代だからこそ、人間と人間の「つながり」「思いやり」の大切さを示唆し、私達に提示しているのだと考える。このような地域の取り組みが、世代を超えて心を繋ぎ、未来へと続くといいと思う。

この記事を読んで、高校時代に見た蛇の崎川原のミニかまくらとその中でゆらゆらと揺れるろうそくの明かりに感動したのを思い出した。ミニかまくらによって作られた天の川が美しいのはもちろんのこと、寒い中ミニかまくらを一つ一つ丁寧に制作してくれた人々に想いを馳せることが、人々により多くの感動をもたらすのではないかと思った。横手のかまくらは約 450 年の歴史があると知り、その伝統を守り続けるかまくら職人の方々やミニかまくらを制作して下さる地域の方々へ感謝するとともに、世代を超えて横手の人々が力を合わせてかまくら文化を継承していることが素敵だと思った。今後もかまくらを作ったり、眺めたり、中に入ったりして、かまくらを楽しみながら文化を継承していきたい。